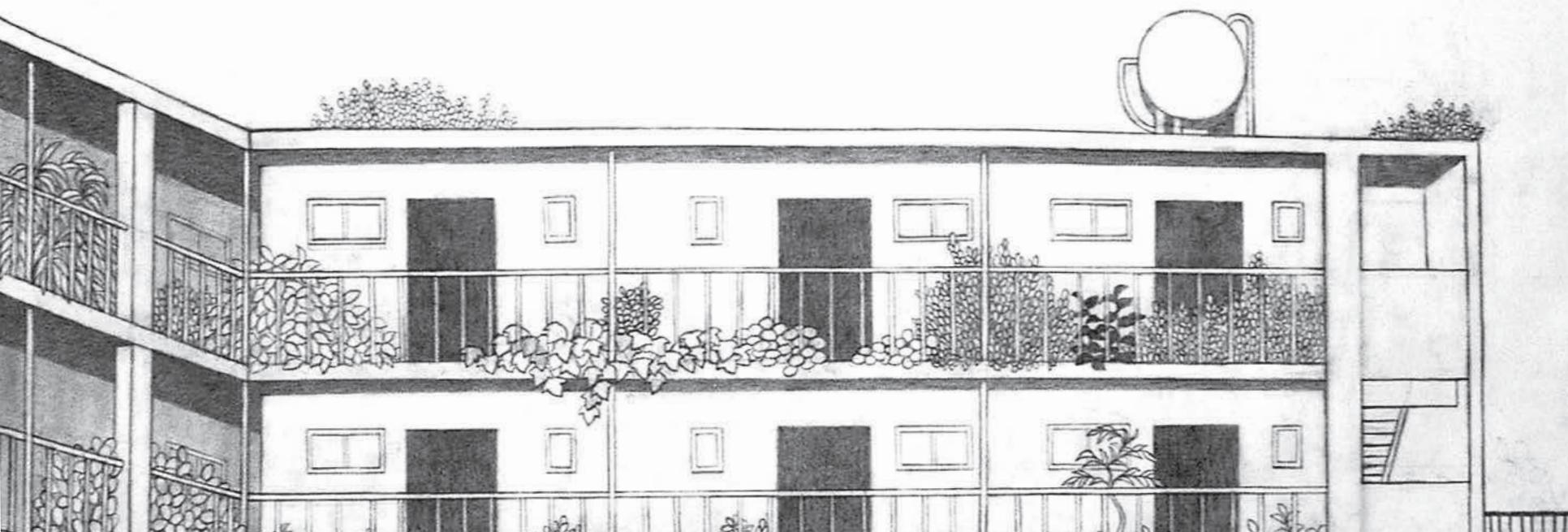


東京画

ささやかなワタシのニチジョウのフーケイ
Tokyo Painting : My Little Everyday Sceneries





 **tokyo wonder site**
Institute of Contemporary Art and
International Cultural Exchange, Tokyo

東京画
ささやかなワタシのニチジョウのフーケイ
Tokyo Painting: My Little Everyday Sceneries

「インティメイトな心象風景としての東京画」 今村有策	04
“TOKYO-GA: intimate inner landscapes of Tokyo” Yusaku Imamura	05
薄曇りの空に——「東京画」概観 飯田志保子	06
“Under a pallid sky” Shihoko Iida	08
須藤由希子 Yukiko Suto	10
近藤恵介 Keisuke Kondo	12
原良介 Ryosuke Hara	15
日野之彦 Korehiko Hino	18
奈良エナミ Enami Nara	20
鮫島大輔 Daisuke Samejima	23
福居伸宏 Nobuhiro Fukui	26
展示風景スペースA Installation View, Space A	28
展示風景スペースB Installation View, Space B	30
展示風景スペースC Installation View, Space C	31
作家略歴、ステイトメント Artists Statements and Biographies	32

インティメイトな心象風景としての東京画

今村有策 | トーキョーワンダーサイト館長、東京都参与

東京画展「東京の風景」の展示風景。

毎年千人を越える応募がある公募展トーキョーワンダーウォールの審査で5年間に5千点以上の作品を見続けるなかで、あるひとつの傾向が存在するを感じていた。それはワンダーウォールの傾向というよりも日本の現在における絵画の一つの傾向といえるのだろうか、それは、とてもパーソナルでインティメイトな日常の風景や物語を描いたもので、それらの作品から醸し出される雰囲気はどこか表面に薄く白い色をかけたような印象を受けるのである。そしてその描かれたトーンと対象との距離感は、国外の作家たちではあまり見たことがない傾向を持っているのである。

今回の展覧会ではそのような傾向を持つ7人の作家がトーキョーワンダーウォールに応募し受賞してきた作家たちのなかから集められている*。作品は描かれた対象や日本画などの絵画技法で集められたのではないので、厳密にひとつのグループとして関連しあうわけではないが、今の日本そして東京の日常の空気をまさに体現する作品が選ばれている。そしてそのタイトルを「東京画」としてみた。東京画といっても、描かれる対称が東京というわけでもなく、ひとつのスタイルがあるわけでもない。若い彼らが描き出す日常の風景と彼らにとって身近な心象オブジェクトが東京のひとつの風景を浮かび上がらせている、それを東京画と呼んでみた。

須藤由希子の作品は、一見何気ない当たり前の風景を白黒の風景で切り取ったかのように見える。しかし、よく見ると実際ありえない風景がそこに差し込まれていて、日常とも非日常ともつかない隙間の時空間に迷い込むことになる。日常の風景は、密やかな冒険の時間となっていくのだ。

原良介の作品も当たり前の風景の時空間の風景を重ねてゆくことによって、私たちをまるで物語の1ページに迷い込ませるかのようなのだ。彼の描くどこかの裏山にでもある林の風景も私たちがどこか場所を喪失して迷い込んだ森の中のような風景だ。

日野之彦の作品は、ギョロ目が印象的なポートレートを描き続けてきた。その精緻でありながら、なぜか一点アンバランスなポートレートは私たちのいびつさを見事に表現している。体は自信なげに前かがみになり、口は半開き。驚愕するでもなく、あきらめるでもなく、喜ぶでもなく、しっかりと前を見つめるでもなく、ポートレートの人物は宙ぶらりん立っている。私たち現代を生きる、いびつとしか言いようのない私たちのポートレートは、こういうものなのかもしれない。

近藤恵介は、かれの個人的な関係を持つオブジェクトからのみ世界が構築されている。山、染み、グリッド、葉入れ、ブラウン管テレビ、など。彼が世界を構築するとき、彼の選んだエレメント以外はその世界の構成要素にはならない。そのオブジェクトとの親密な関係によってのみ立ち現れる世界が、足が地面からたった5センチ浮かんだような非日常と微妙な、日常と非日常の世界が交錯している。

奈良エナミは、スケートボードに乗る若者たちや女性たちが取っ組み合いのけんかをする様をインターネットからダウンロードし、身体を色の固まりの重なりのように描きとめてゆく。その身体は抽象化され、まるでぬいぐるみのような身体となり、くまのぬいぐるみのように人間が溺愛するフェイクなオブジェクトと重なり合う。私たちのリアリテはかくも3回転半ひねりをすることによってしか獲得できはしないのだ。

鮫島大輔は、フレームと絵画が逆転している。フレームこそが絵画であり、そのフレームに彼は絵画を描きとめてゆく。その反転に見出される意味と裏腹に描かれる風景はあまりに凡庸な見飽きた日常の風景だ。その逆転からしか、私たちは日常の風景から自分の風景を見出せないのかもしれない。

福居伸宏の写真は、深夜3時の東京の風景である。曇天の深夜に映し出された東京の風景は、雲をレフ版にして正確な街の光と闇を映し出す。その透明なまなざしは、私たちに見慣れた風景を、まったく見たことのない名状しがたいものとして現出させ

福居伸宏「東京の風景」の展示風景。

薄曇りの空に——「東京画」概観 | 飯田志保子

展覧会には作品が醸成するトーンがある。「東京画」を覆う大気は白く薄い。とりわけて関連も交錯もしない本展の作品はしかし、通低する基調を同じくしたグレースケールのようにわずかな差異の連続として経験される。

須藤由希子が描くのは漂白された無名の風景である。モチーフをシステムティックに組み合わせて架空の風景を創出するそのサンプリング的な作品は、よくある眺めであってもどこか遠く希薄で実体を感じさせない。それは身近な日常風景の様相を呈しながら誰のものでもない、客体化された「純粹風景画」とも言えるものである。だが作品の表層へと引き離された私たちの視点を画面に繋ぎとめるものがある。鉛筆の筆致、キャンパスに残ったその擦れ跡、そして部分的に彩色された草花——構成された風景内のかすかな生っぽい手触りに自らの身体性を重ね合わせ、私たちはそれを今一度身近な日常風景として眺めることができる。

須藤が人工的な風景のなかに身体性を残す一方で、奈良エナミは身体を形体に還元する。作品の基にはウェブ上の写真を

用い、版で構成するときのような色の面で髪、顔、腕、胴と大まかなパーツごとに塗り分けることによって、奈良が見ているイメージは誰もが目にするマス・イメージになっていく。これは「ワタシのフーケイ」が「アナタのフーケイ」と同化し、情報化していくプロセスでもある。

近藤恵介の視点は逆に、きわめて個人的な日常の末端に入り込んでいる。画面上や壁に脈絡なく見えるように併置されたモチーフや出来事の断片は、意味を成すでも物語を語るでもなく、一つに統合される前に解けていく。それを助長しているのが、細部に至る綿密な描き込みと、支持体の用紙に元々付着しているかのように描かれた線、染み、汚れである。作品に近寄り断片を紡ぎ、あと一步で風景として具体化されるところで、私たちは近藤の「ニチジョウ」を見るマクロな視点に足元から落とされるような経験をする。

このように寄るにせよ離れるにせよ対象を距離化する作家が少なくないなか、原良介は対象に近い距離で風景を描き出す。特に新作の《by a lake》(2007)は人物の軽やかな動きと

それを眺める原の視線の移動を追うことができ、映像を見るような同調が可能である。ただし映像的な作品ではない。彼の他の作品と同様に、分割された筆致が視線の行く先を画面に留め一旦は固定する。画面に流れを与えているのは、長く伸びやかになったストロークと軽快さを生む明るい色調である。一枚の絵のなかで移り変わる固定と流動の連続が、原の描く風景から私たちが眺める風景までを並行するものとして接続する。

日野之彦の人物像は同化と異化である。どの人物も大きな目と背を丸めたポーズの異様な身体表現によって個性を剥奪され、互いに同化され、私たちを異化する。日野の作品に現代社会の負のイメージを投影するのは安直すぎるが、それでも彼が描く人物の存在感は目を反らすことができない力強さを持って私たちに迫る。国内の表現のユニークさは内側から見出しにくいこともあるが、日野の作品は外からの眼差しを疑似体験させてくれるようでもある。こうした異様な独自性が培われる土壌もここには確かにあるのだと。

本展では、さまざまな表層の集積が「東京」を単一のイメージで括ることから逃れさせ、安易な世代論や都市論に回収されない現実を映し出す鏡となって各作家の個性を打ち出している。固定化されないその拡散性こそが、東京という都市を表層的な空間にしている。それは蜃気楼のように薄く揺れ動き、ヴォリュームと実存性を欠いた空間である。近年の都市建築においても外部空間を皮膜化して内部と一体化する傾向が顕著だが、鮫島大輔のフレームに対するアプローチもそれに近いものとして見ることができるだろう。額縁の中身は空白のまま縁そのものに描く鮫島の仕事は、フレーミングによって風景を切り取ることやシアトリカルな装置を作ることだけでなく、絵画の外部をイメージが発生する空間として実体化させている。

また、表層空間の住人である本展の作家にとって、手ごたえある現実はその表層のなかにあり、彼らは希薄さのなかにも密度の高いリアリティを見出している。福居伸宏のアノニマスな風景は須藤のとは異なり実在するものだが、パー

スペクティヴが消失した彼の写真は、あらゆるディテールが均質となって一枚の薄いイメージのなかに圧縮されている。そこではアパートの窓ごしに見える観葉植物や干したTシャツと遠くのビル一棟が等価な画像として写し出される。情報過多な写真であるのに猥雑さを感じさせないのは、福居が撮影日時を曇りの夜中に限定していることにも由来しているだろう。薄曇りの空はレフ板となって光を均質に回し、深夜の静寂は情報のノイズすら闇に吸い込む。

「東京」は日本の現代社会や都市風景を切り取る記号として用いるにはあまりにも大きい。その大きな表象に埋もれながら感じられるほんの一握りの手触りを描き出すことが、彼らにとっては、薄曇りの空に覆われた都市のなかで自分の確かな身体性を確保する術である。リアリティが壮大なものである必要はない。でなければどうやって自身の生を感じられるだろうか。日常性は日本の現代美術においても息の長いテーマだが、人々の任意の共感を期待するひそやかでささや

かな独り言から、見落とされこぼれ落ちた隙間に滑り込む侵入者の視点へと、作家たちはより確信的に日常性へのアプローチを変えている。彼らの目を借景ならぬ借眼することで、私たちは「東京」が表象する作品の現代性を読み直すことができるのかもしれない。

いいだ・しほこ | 東京オペラシティアートギャラリー | キュレーター

Under a pallid sky | Shihoko Iida

Every exhibition has its own distinct tone nurtured by the artworks on display. The tone of the aura these “Tokyo-Ga” are wrapped in is pale and white. There is no particular direct connection or anything the works shown here have in common, but yet the visitor to this exhibition can appreciate a range of subtle differences comparable to shades on a greyscale that forms the virtual basis all contributions share on a subliminal level.

Yukiko Suto draws somewhat bleached, anonymous landscapes. The fictitious sceneries she creates by “sampling” and combining systematically a variety of motifs all look ordinary and familiar, yet so faint and distant that they lack a sense of materiality. While depicting in fact aspects of the artist’s personal everyday environment, these pictures could rather be categorized as objective, “pure landscape drawings” showing nameless sceneries. However, left in front the images’ superficial layers, the viewer ends up yielding himself to the images’ strangely captivating charm. Traces of the pencil’s friction on the canvases, and partially colored flowers and plants – vague indications of life in these composed landscapes onto which we project ourselves and turn the sceneries we see into our own ones.

While Suto lets such aspects of physicality linger in her artificial worlds, Enami Nara reduces the human body to geometrical features. The artist picks up images of human figures from the Internet, loosely divides their bodies into color parts – hair, face, arms, torso, etc. – and reconstructs them in a block print kind of style. The concrete image Nara sees transforms into a mass image as all of us would be seeing it. Her creative process is also a process of digitizing and turning “my scenery” into “your scenery”.

Keisuke Kondo, on the other hand, is forging ahead to the fringes of a very personal experience of daily life. In his images, fragments of motifs and sceneries arranged seemingly without context on canvases and walls dissolve even before conglomerating into something that could possibly make sense or become narrative. Conducive to Kondo’s art is his minute, down-to-detail drawing style, and such elements as drawn lines, stains and dirt that always look as if they had been on the paper even before the artist started drawing. When approaching these works and trying to put the pieces together, the viewer experiences how, seconds before finishing the puzzle, Kondo pulls the rug out from

under his feet to drag him into the artist’s own private macro perspective of the “everyday”.

While many artists like to metrize their subject matter by either zooming in or out, Ryosuke Hara paints his landscapes at close range. Especially in his newest work, *by a lake* (2007), the viewer can trace humans’ light movements along with Hara’s observing eye, and synchronize with it just as if watching a movie. However, these aren’t iconic pictures. Like in Hara’s other works, segmented brushstrokes pinpoint his line of vision and fix it on the canvas. What nonetheless lend the images a sense of motion are Hara’s long, stretched brushstrokes, and his use of bright colors that create an airy atmosphere. The continual shifts of stop and go in each of his works create connections between what the artist paints and what we are looking at, as two different sceneries that go side by side.

Korehiko Hino’s portraits combine aspects of assimilation and dissimilation at once. Every figure he paints is standing hunched and looking out of big, goggling eyes. Stripped of their individual features through such bizarre physical expression, these characters assimilate to each other while dissimilating from

the viewer. To project onto Hino’s works all the negative images of contemporary society would be too simple, but nonetheless the human figures he draws appeal to us with too strong a sense of presence and intensity to be ignored. While it is certainly difficult to define the uniqueness of Japanese art when looking at it from the same country, watching Hino’s works is a bit like making a simulated experience of a foreign perspective that shows that there does exist soil here for cultivating extraordinary originality.

With an accumulation of a variety of surfaces, this exhibition avoids to portray “Tokyo” with a uniform image, and by highlighting each participating artist’s individual style it manages to function as a mirror of aspects of reality that are never covered by easy theoretical discussions of generation and city issues. This diffuseness as a weapon against stereotypes is exactly what helps present the city of Tokyo as a superficial space. It is a space that slightly sways like a mirage, without volume or materiality. In urban architecture, it has been a notable trend in recent years to treat exterior spaces as a sort of malleable skin that integrates into buildings’ interiors. Daisuke Samejima’s frame paintings can be appreciated as results of a similar kind of

approach. Not only does Samejima, who paints on the frames and leaves the space inside completely blank, produce theatrical devices to “frame” sceneries, but he materializes the spaces outside of his paintings as spaces in which images can grow.

For the artists as residents of this superficial space, the solid reality lies in that superficiality, and even in its paleness they find a highly dense reality. Different from Suto’s drawings, Nobuhiro Fukui’s anonymous sceneries exist in real life, but as a consequence of the nonexistent perspective in his photographs, all kinds of details are being heterogeneously condensed in single, flat images. Everything from house plants and T-shirts hung out to dry, to a building in the back appear as equivalent parts of a picture. Although surfeit of information, these photographs don’t look messy, which must be due to the fact that Fukui exclusively shoots his photographs under cloudy night skies. The obscured sky functions as a reflector that distributes light in a homogeneous way, while the darkness and tranquility of the night is swallowing even the noise of the information overkill.

“Tokyo” is just too big a place to qualify as a symbol for

showing aspects of contemporary Japanese society and urban landscape. To capture in their works that very vague texture they feel while buried under the vast surface of the city is for the artists a way to assure themselves of their physicality under the veil of the cloudy Tokyo sky. Reality doesn’t have to be a spectacular thing. But how is it possible then to feel the “being alive” of one’s own body? Ordinariness has been a long-term theme in Japanese contemporary art, whereas artists have changed their perspectives from quiet and modest murmurs asking for arbitrary sympathy to a rather convinced approach to normality as intruders that slip through otherwise overlooked gaps. A visit to this exhibition seems to me like an occasion to borrow the eyes of these seven artists and reconsider the modernity of what each of them extracts from the place we call “Tokyo”.

Shihoko Iida | Curator, Tokyo Opera City Art Gallery



須藤由希子 | Yukiko Suto



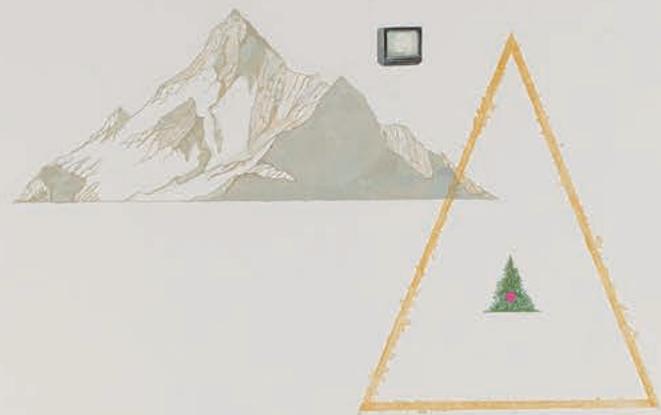
家庭菜園
Kitchen Garden
 2006
 油彩、鉛筆、石膏下地、カンヴァス
 Oil, pencil, plaster on canvas
 65×50 cm

●
 浜辺
The Beach
 2005
 油彩、カンヴァス
 Oil on canvas
 130.3×194 cm



ほとけの座
Lamium amplexicaule
 2006
 油彩、鉛筆、石膏下地、カンヴァス
 Oil, pencil, plaster on canvas
 50×65 cm





GREEN & SOUND

2007
 岩絵の具、水干、膠、アクリル、水彩、新島の子紙
 Powdered mineral pigments, bone glue, acrylic,
 water-color, cross-section paper
 各 / each 22×14cm
 壁画(部分)
 Wall paint (detail)

Orion between forest and Mt. Fuji

2007
 油彩、カンヴァス、ラインストーン
 Oil on canvas, rhinestone
 53×65.2 cm



THREE MOONS

2007
 油彩、カンヴァス
 Oil on canvas
 145.5×112 cm



原良介 | Ryosuke Hara



BY A FOREST
2006
油彩、カンヴァス
Oil on canvas
130.3 × 194 cm



BY A LAKE
2007
油彩、カンヴァス
Oil on canvas
162 × 227.3 cm

オレ
Me
2006
油彩、カンヴァス
Oil on canvas
165×106 cm



あの女
That's She
2006
油彩、カンヴァス
Oil on canvas
162×112 cm





audience
 2007
 アクリル、カンヴァス
 Acrylic on canvas
 72.7 × 90.9 cm

skateboarding (#10)
 2005
 アクリル、カンヴァス
 Acrylic on canvas
 89.4 × 145.5 cm





fight
2007
木版、和紙
Woodcut, Japanese paper
64×81 cm



fight
2007
木版、和紙
Woodcut, Japanese paper
64×81 cm



展示風景：「東京画」トーキョーワンダーサイト渋谷、2007、東京
Installation View: "Tokyo Painting," Tokyo Wonder Site Shibuya, 2007, Tokyo

鮫島大輔 | Daisuke Samejima



Long Distance 2007
 2007
 アクリル、スタイロフォーム
 Acrylic on styrofoam
 180 × 270 cm



Long Distance 2
 2004
 アクリル、木
 Acrylic on wood panel
 240 × 240 cm



Multiples - 01
2007
顔料プリント、プレキシガラス
pigment print mounted on plexiglass
48×72 cm



Multiples - 03
2007
顔料プリント、プレキシガラス
pigment print mounted on plexiglass
48×72 cm



Multiples - 08
2007
顔料プリント、プレキシガラス
pigment print mounted on plexiglass
48×72 cm



Multiples - 02
2007
顔料プリント、プレキシガラス
pigment print mounted on plexiglass
48×72 cm



展示風景 | Installation View

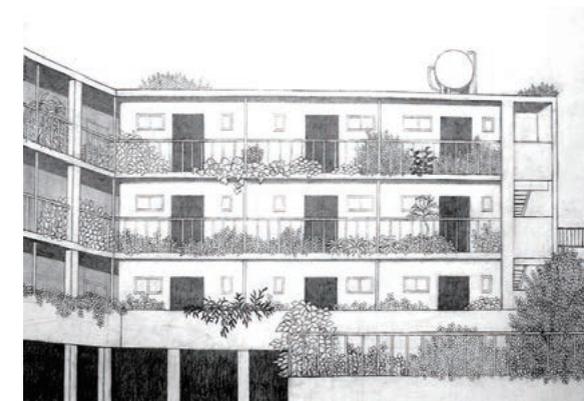


須藤由希子 | Yukiko Suto

ARTIST STATEMENT

街を歩いていると「絵に描きたい」と感じる風景があるので、写真に撮ったりスケッチするなどして、家でそれをもとに絵を描くというのが基本の制作態度です。この作業はシンプルだけれど、「描きたい」と感じる要因には街や私のこれまでの経験やその時の気持ちや本能等々いろいろなことが複雑に影響していると思うので、それを描くことは多くの要素を含む深みのある作業だと思っています。

I often spot sceneries I feel like drawing when walking in the streets. I take photos or sketch those sceneries, and draw based on my photos or sketches once I'm back home. That's my basic idea of drawing, and although it's a very simple process, there is always an entanglement of experiences, feelings, instincts, and other aspects that take effect and make me want to draw, so after all I think that it's a rather complex work that involves a variety of elements.



緑化マンション | Green Apartment 2004

作家略歴

1978 神奈川県生まれ
2001 多摩美術大学デザイン科グラフィックデザイン専攻卒業

主な個展

2007 「project N」東京オペラシティアートギャラリー4Fコリドール、東京
2007 「この庭に 黒いミンクの話 原画展」Gallery at lammfromm、東京
2006 「トーキョーワンダーウォール都庁2005」東京都庁、東京
2006 Cafe d' Art、鹿児島
2004 TAKEFLOOR、東京

主なグループ展

2006 「百花撩乱」ボイス・プランニング、神奈川
2005 「トーキョーワンダーウォール公募2005」東京都現代美術館、東京
2003 「装画を描くコンペティションVol.2受賞者展」ギャラリーハウス・MAYA、東京

その他

2005 GEISAI #8、藤本やすし賞受賞
2005 トーキョーワンダーウォール公募2005、トーキョーワンダーウォール賞受賞
2004 第22回ザ・チョイス大賞、2004年度優秀賞受賞
2002 装画を描くコンペティションVol.2、祖父江慎賞受賞

BIOGRAPHY

1978 Born in Kanagawa
2001 Graduated from Graphic Design Course, Department of Design Faculty of Art and Design, Tama Art University

Selected Solo Exhibitions

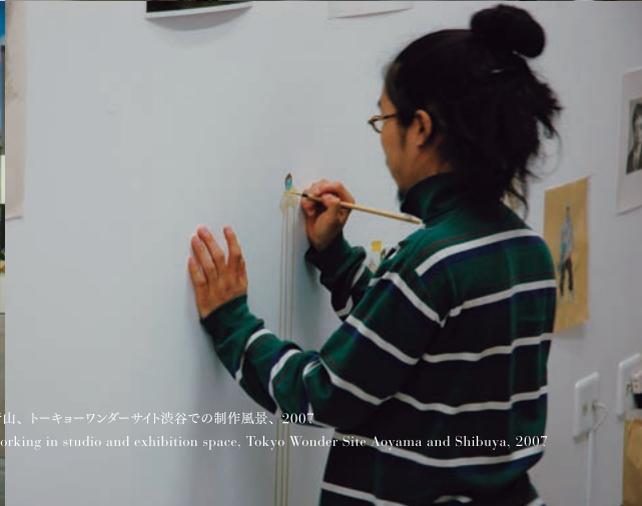
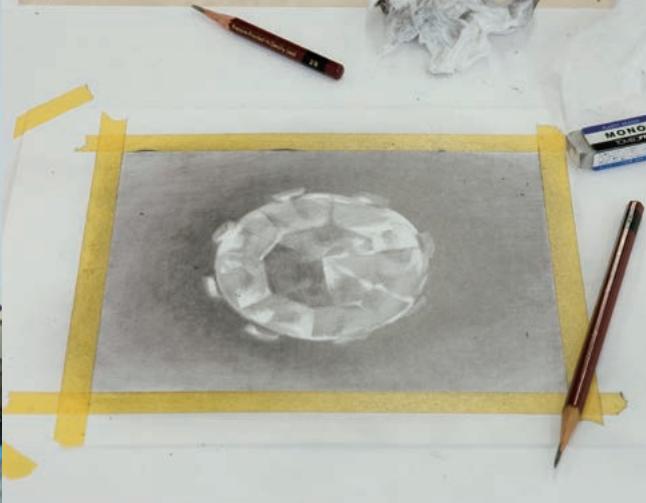
2007 “project N,” Tokyo Opera City Art Gallery 4F Corridor, Tokyo
2007 “In this Garden – the Story of the Black Mink – Original Picture Exhibition,” Gallery at lammfromm, Tokyo
2006 “Tokyo Wonder Wall 2005,” Tokyo Metropolitan Government Office, Tokyo
2006 Cafe d' Art, Kagoshima
2004 TAKEFLOOR

Selected Group Exhibitions

2006 “The BOICE PLANNING is covered with a profusion of flowers,” BOICE PLANNING, Kanagawa
2005 “Tokyo Wonder Wall 2005,” Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo
2003 “Illustration Competition for the Book Design Vol.2 Prize Winner Exhibition,” Gallery House MAYA, Tokyo

Others

2005 Awarded “Yasushi Fujimoto Prize, GEISAI #8”
2005 Awarded “Tokyo Wonder Wall Prize, Tokyo Wonder Wall 2005”
2004 Awarded “Outstanding Performance Award, The 22nd The Choice Grand Prize”
2002 Awarded “Shin Sobue Prize, Illustration Competition for the Book Design Vol.2”



トーキョーワンダーサイト青山、トーキョーワンダーサイト渋谷での制作風景、2007
Participating artists working in studio and exhibition space, Tokyo Wonder Site Aoyama and Shibuya, 2007

<div><div></div>近藤 恵介 Keisuke Kondo</div>
<div></div>
主な個展
2006 「毎朝歩く道について寝る前に考える」トーキョーワンダーサイト本郷、東京 <p>2006 「トーキョーワンダーウォール都庁2005」東京都庁、東京</p> 2005 RICE+、東京
主なグループ展
2007 「東京芸術大学 卒業・修了制作作品展」東京都美術館、東京 <p>2006 「東京―サンフランシスコアートフェスティバル ’06」the LAB、サンフランシスコ</p> 2006 「東京―サンフランシスコアートフェスティバル ’06」国営昭和記念公園、東京 2006 「ワンダーシード2006」トーキョーワンダーサイト渋谷、東京 <p>2005 「トーキョーワンダーウォール公募2005」東京都現代美術館、東京</p>
その他
2005 The Ambassadors’ Art Prize 2005、Decourtenay Prize 受賞 <p>2005 トーキョーワンダーウォール公募2005、トーキョーワンダーウォール賞受賞</p>

ARTIST STATEMENT

私の絵画作品は、日々の生活を送るなかで入ってくる情報や浮かんだ考え等、様々なイメージをサンプリングすることから始まります。身の回りにある、親密な関係を持つものが主な対象です。集められたものは、私の生活における視点を強く反映しています。また、 サンプリングするために観察することは、最も重要だと考えています。

これらの収集した日々の要素を再構成して、現在の生活の現実を描きます。その際、物や事に対してどのように反応するかが問われます。

食べたり、寝たり、話したり、そのような自然な生活の中から作品が立ち上がってきます。私にとって、絵を描く事は重要なことですが、特別なことではありません。生活のなかの一つの構成要素です。絵を描くことは、フレキシブルでリズム感のいい生活を与えてくれます。また、そのような生活はいい絵を描くことを助けます。

そして、絵を描いているときに感じる、身体的な気持ち良さは、音楽を聴く時に感じる感覚に似ています。

.....

I’m building my paintings upon all sorts of images I “sample” from the various input and thoughts I’m getting out of day-to-day life. My targets I’m finding mainly in my direct personal environment, in objects that I’ve developed a particularly intimate relationship with. The objects I’m gathering in my work reflect quite intensely my own perspective on life. I consider sampling based on careful observation as the most important part in my work.

These collected aspects of my own everyday I reconstitute to create sceneries reflecting the reality of contemporary life, whereas the central question is always how I respond to certain things.

My works emerge out of such natural daily activities as eating, sleeping, or talking. To paint is important to me, but it's nothing extraordinary. Painting is nothing more than an ingredient that adds flexibility and a sense of rhythm to my daily life, which in return is helpful for creating good paintings.

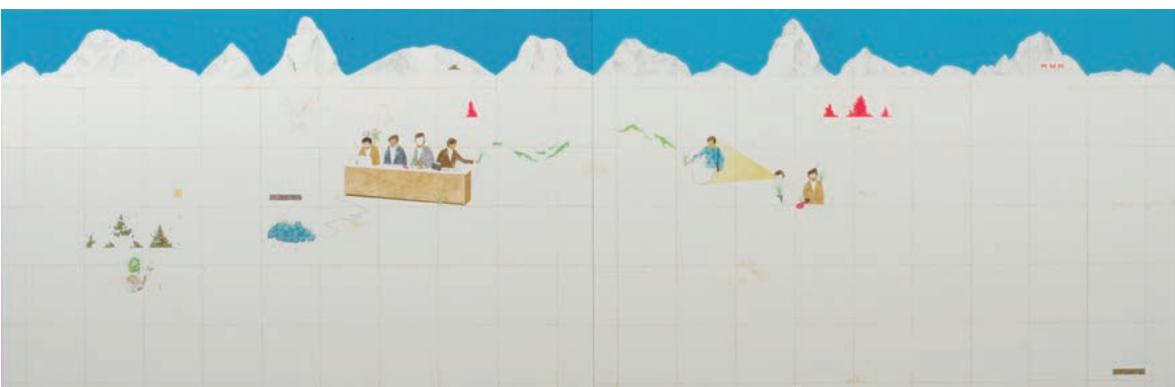
The physical sense of pleasure I feel when painting is in a way similar to the joy of listening to music.

<div><div></div>artists statements and biographies</div>
<div></div>
作家略歴
1981 福岡県生まれ <p>2007 東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業</p>
主な個展
2006 「毎朝歩く道について寝る前に考える」トーキョーワンダーサイト本郷、東京 <p>2006 「トーキョーワンダーウォール都庁2005」東京都庁、東京</p> 2005 RICE+、東京
主なグループ展
2007 「東京芸術大学 卒業・修了制作作品展」東京都美術館、東京 <p>2006 「東京―サンフランシスコアートフェスティバル ’06」the LAB、サンフランシスコ</p> 2006 「東京―サンフランシスコアートフェスティバル ’06」国営昭和記念公園、東京 2006 「ワンダーシード2006」トーキョーワンダーサイト渋谷、東京 <p>2005 「トーキョーワンダーウォール公募2005」東京都現代美術館、東京</p>
その他
2005 The Ambassadors’ Art Prize 2005、Decourtenay Prize 受賞 <p>2005 トーキョーワンダーウォール公募2005、トーキョーワンダーウォール賞受賞</p>

<div><div></div>artists statements and biographies</div>
<div></div>
作家略歴
1981 福岡県生まれ <p>2007 東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業</p>
主な個展
2006 「毎朝歩く道について寝る前に考える」トーキョーワンダーサイト本郷、東京 <p>2006 「トーキョーワンダーウォール都庁2005」東京都庁、東京</p> 2005 RICE+、東京
主なグループ展
2007 「東京芸術大学 卒業・修了制作作品展」東京都美術館、東京 <p>2006 「東京―サンフランシスコアートフェスティバル ’06」the LAB、サンフランシスコ</p> 2006 「東京―サンフランシスコアートフェスティバル ’06」国営昭和記念公園、東京 2006 「ワンダーシード2006」トーキョーワンダーサイト渋谷、東京 <p>2005 「トーキョーワンダーウォール公募2005」東京都現代美術館、東京</p>
その他
2005 The Ambassadors’ Art Prize 2005、Decourtenay Prize 受賞 <p>2005 トーキョーワンダーウォール公募2005、トーキョーワンダーウォール賞受賞</p>

<div><div></div>artists statements and biographies</div>
<div></div>
作家略歴
1981 福岡県生まれ <p>2007 東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業</p>
主な個展
2006 「毎朝歩く道について寝る前に考える」トーキョーワンダーサイト本郷、東京 <p>2006 「トーキョーワンダーウォール都庁2005」東京都庁、東京</p> 2005 RICE+、東京
主なグループ展
2007 「東京芸術大学 卒業・修了制作作品展」東京都美術館、東京 <p>2006 「東京―サンフランシスコアートフェスティバル ’06」the LAB、サンフランシスコ</p> 2006 「東京―サンフランシスコアートフェスティバル ’06」国営昭和記念公園、東京 2006 「ワンダーシード2006」トーキョーワンダーサイト渋谷、東京 <p>2005 「トーキョーワンダーウォール公募2005」東京都現代美術館、東京</p>
その他
2005 The Ambassadors’ Art Prize 2005、Decourtenay Prize 受賞 <p>2005 トーキョーワンダーウォール公募2005、トーキョーワンダーウォール賞受賞</p>

<div><div></div>artists statements and biographies</div>
<div></div>
作家略歴
1981 福岡県生まれ <p>2007 東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業</p>
主な個展
2006 「毎朝歩く道について寝る前に考える」トーキョーワンダーサイト本郷、東京 <p>2006 「トーキョーワンダーウォール都庁2005」東京都庁、東京</p> 2005 RICE+、東京
主なグループ展
2007 「東京芸術大学 卒業・修了制作作品展」東京都美術館、東京 <p>2006 「東京―サンフランシスコアートフェスティバル ’06」the LAB、サンフランシスコ</p> 2006 「東京―サンフランシスコアートフェスティバル ’06」国営昭和記念公園、東京 2006 「ワンダーシード2006」トーキョーワンダーサイト渋谷、東京 <p>2005 「トーキョーワンダーウォール公募2005」東京都現代美術館、東京</p>
その他
2005 The Ambassadors’ Art Prize 2005、Decourtenay Prize 受賞 <p>2005 トーキョーワンダーウォール公募2005、トーキョーワンダーウォール賞受賞</p>



毎朝歩く道について寝る前に考える | Thinking in bed about the path I walk along every morning 2006

<div><div></div>keuisuke kondo / ryosuke hara</div>
<div></div>
BIOGRAPHY
1981 Born in Fukuoka <p>2007 Graduated from Japanese Painting Course, Tokyo National University of Fine Arts and Music</p>
Selected Solo Exhibitions
2006 “Thinking in bed about the path I walk along every morning,” Tokyo Wonder Site Hongo, Tokyo <p>2006 “Tokyo Wonder Wall 2005,” Tokyo Metropolitan Government Office, Tokyo</p> 2005 RICE+, Tokyo
Selected Group Exhibitions
2007 “Tokyo National University of Fine Arts and Music The 55th Graduation Works Exhibition,” The Tokyo Metropolitan Art Museum <p>2006 “TOKYO-SAN FRANCISCO ART FESTIVAL ’06,” the LAB, San Francisco</p> 2006 “TOKYO-SAN FRANCISCO ART FESTIVAL ’06,” Tokyo <p>2006 “Wonder Seeds 2006,” Tokyo Wonder Site Shibuya, Tokyo</p> 2005 “Tokyo Wonder Wall 2005,” Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo
Others
2005 Awarded “Decourtenay Prize, the Ambassadors’ Art Prize 2005” <p>2005 Awarded “Tokyo Wonder Wall Prize, Tokyo Wonder Wall 2005”</p>

<div><div></div>tokyo painting</div>
<div></div>
原良介 Ryosuke Hara
<div></div>
作家略歴
1975 神奈川県生まれ <p>2000 多摩美術大学美術学部卒業</p> 2002 多摩美術大学大学院修了
主な個展
2007 「BY A FOREST」Gallery Stump Kamakura, 神奈川 <p>2006 「sprout drawing」ユカ・ササハラ・ギャラリー、東京</p> 2006 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2005 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2002 「原良介展」トーキョーワンダーサイト本郷、東京
主なグループ展
2006 「百花繚乱」ボイス・プランニング、神奈川 <p>2004 コンテナ・グラウンド、東京デザイナーズウィーク2004、東京</p>
その他
2001 トーキョーワンダーウォール公募2001、大賞受賞

<div><div></div>tokyo painting</div>
<div></div>
原良介 Ryosuke Hara
<div></div>
作家略歴
1975 神奈川県生まれ <p>2000 多摩美術大学美術学部卒業</p> 2002 多摩美術大学大学院修了
主な個展
2007 「BY A FOREST」Gallery Stump Kamakura, 神奈川 <p>2006 「sprout drawing」ユカ・ササハラ・ギャラリー、東京</p> 2006 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2005 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2002 「原良介展」トーキョーワンダーサイト本郷、東京
主なグループ展
2006 「百花繚乱」ボイス・プランニング、神奈川 <p>2004 コンテナ・グラウンド、東京デザイナーズウィーク2004、東京</p>
その他
2001 トーキョーワンダーウォール公募2001、大賞受賞

私の絵画には特異な時間や空間が存在する。ある一瞬をとらえるのではなく、複数の時間や複数の空間を同時に一つの現象として存在させることができるのが絵画だと思うからだ。

それを観る人が肯定しやすいように、視覚的にごくありふれた状況へ置き換える。そのときにするのは、画面上に登場するすべてのものを等価に扱うようにするという。モチーフの強弱をなくすため重ね塗りをせずすべて一層のみで描く。そうすることで画面上のすべてのものは公平な風景の一部となる。複数の時間、異なったものをそれぞれ同一画面上で等価に反響させ、別の価値が生まれる状況をつくり出そうとする試みだ。

.....

My paintings combine peculiar kinds of time and space. Rather than capturing only a single place at a certain moment, my idea of a painting is that of a platform for multiple times and places to exist at once.

In order to make it easy for the viewer to affirm, visually I’m showing very simple, commonplace situations. By avoiding to paint in layers I make sure to treat all elements on the canvas equally. Only when al things are on the same level, they can be equitable parts of a scenery.

This technique reflects my attempt to capture on the same canvas and on an equal level different things at different times, and by doing so create situations out of which new sets of values can emerge.

<div><div></div>tokyo painting</div>
<div></div>
作家略歴
1975 神奈川県生まれ <p>2000 多摩美術大学美術学部卒業</p> 2002 多摩美術大学大学院修了
主な個展
2007 「BY A FOREST」Gallery Stump Kamakura, 神奈川 <p>2006 「sprout drawing」ユカ・ササハラ・ギャラリー、東京</p> 2006 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2005 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2002 「原良介展」トーキョーワンダーサイト本郷、東京
主なグループ展
2006 「百花繚乱」ボイス・プランニング、神奈川 <p>2004 コンテナ・グラウンド、東京デザイナーズウィーク2004、東京</p>
その他
2001 トーキョーワンダーウォール公募2001、大賞受賞

<div><div></div>tokyo painting</div>
<div></div>
作家略歴
1975 神奈川県生まれ <p>2000 多摩美術大学美術学部卒業</p> 2002 多摩美術大学大学院修了
主な個展
2007 「BY A FOREST」Gallery Stump Kamakura, 神奈川 <p>2006 「sprout drawing」ユカ・ササハラ・ギャラリー、東京</p> 2006 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2005 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2002 「原良介展」トーキョーワンダーサイト本郷、東京
主なグループ展
2006 「百花繚乱」ボイス・プランニング、神奈川 <p>2004 コンテナ・グラウンド、東京デザイナーズウィーク2004、東京</p>
その他
2001 トーキョーワンダーウォール公募2001、大賞受賞

<div><div></div>tokyo painting</div>
<div></div>
作家略歴
1975 神奈川県生まれ <p>2000 多摩美術大学美術学部卒業</p> 2002 多摩美術大学大学院修了
主な個展
2007 「BY A FOREST」Gallery Stump Kamakura, 神奈川 <p>2006 「sprout drawing」ユカ・ササハラ・ギャラリー、東京</p> 2006 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2005 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2002 「原良介展」トーキョーワンダーサイト本郷、東京
主なグループ展
2006 「百花繚乱」ボイス・プランニング、神奈川 <p>2004 コンテナ・グラウンド、東京デザイナーズウィーク2004、東京</p>
その他
2001 トーキョーワンダーウォール公募2001、大賞受賞

<div><div></div>tokyo painting</div>
<div></div>
作家略歴
1975 神奈川県生まれ <p>2000 多摩美術大学美術学部卒業</p> 2002 多摩美術大学大学院修了
主な個展
2007 「BY A FOREST」Gallery Stump Kamakura, 神奈川 <p>2006 「sprout drawing」ユカ・ササハラ・ギャラリー、東京</p> 2006 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2005 「原良介展」スペース・ギャラリー、大阪 2002 「原良介展」トーキョーワンダーサイト本郷、東京
主なグループ展
2006 「百花繚乱」ボイス・プランニング、神奈川 <p>2004 コンテナ・グラウンド、東京デザイナーズウィーク2004、東京</p>
その他
2001 トーキョーワンダーウォール公募2001、大賞受賞



sprout drawing 2006 高橋コレクション

<div><div></div>BIOGRAPHY</div>
1975 Born in Kanagawa <p>2000 Graduated from Department of Oil Painting, Tama Art University</p> 2001 Completed Master Program, Tama Art University
Selected Solo Exhibitions
2007 “BY A FOREST,” Gallery Stump Kamakura, Kanagawa <p>2006 “sprout drawing,” Yuka Sasahara Gallery, Tokyo</p> 2006 Space Gallery, Osaka 2005 Space Gallery, Osaka 2000 Tokyo Wonder Site Hongo, Tokyo
Selected Group Exhibitions
2006 “The BOICE PLANNING is covered with a profusion of flowers,” BOICE PLANNING, Kanagawa <p>2004 “Container Ground,” Tokyo Designer’ s Week 2004, Tokyo</p>
Others
2001 Awarded “Grand Prize, Tokyo Wonder Wall 2001”

鮫島大輔 | Daisuke Samejima

<p></p>
<p>作家略歴 BIOGRAPHY</p>
<p>1979 兵庫県生まれ</p> <p>2003 多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻卒業</p> <p>2005 多摩美術大学美術学部大学院美術研究科修了</p>
<p>主な個展</p>

ARTIST STATEMENT

都市に暮らしていて、自分が住む街のあまりに平凡な風景が気になりだした。ここがどこだと特定できるようなものは何もなく、同じ色のアスファルト、同じ標識、同じ様式の建売住宅。退屈だといってしまえばそれまでだが、これこそが人生の風景だと思うとこれを描かずして何を描くのかと思った。

このなんでもない風景をこのままの表情で、そこにあるように描くにはどうすればいいのか？私は一つの答えとして中心の抜けたフレームにこれらの風景を描くことにした。

脇役は脇役らしく、視界の端にあればいい。

このフレームを展示会場に立ち上がらせることによって、ニチジョウのフーケイは視界の端にありながらもしっかりと存在感を持って見えてくるだろう。

Residing in the city, I began to feel uneasy about the undistinguished character of my living environment. There is the same color of asphalt, the same traffic signs, the same ready-built houses, and nothing that would tell the visitor in what part of Tokyo he is. It’s a boring scenery, that’s a fact, but it’s the scenery of life, so I felt that, if I want to paint, this is where I have to begin.

So I started thinking about how to reflect the emptiness of his common-or-garden kind of place, and came up with the idea to paint my landscapes onto frames while leaving everything inside completely blank.

It seemed just fine to me if the supporting player stayed in the background where he is supposed to be. By placing these painted frames in the environment of an exhibition hall, I believe that I can highlight the presence of these background scenes of daily life.

<p>1979 Born in Hyogo</p> <p>2003 Graduated from Department of Oil Painting, Tama Art University</p> <p>2005 Completed the master program of Tama Art University</p>
--

artists statements and biographies

<p>作家略歴 BIOGRAPHY</p>
<p>1979 兵庫県生まれ</p> <p>2003 多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻卒業</p> <p>2005 多摩美術大学美術学部大学院美術研究科修了</p>
<p>主な個展</p>

2006 「Everyday Journey——次元を超えたランドスケープペインティングへ」equal、大阪

2005 「+ beautiful world +」petal fugal、東京

2003 「WALK IN CUBE」トーキョーワンダーサイト本郷、東京

2002 「トーキョーワンダーウォール都庁2002」東京都庁舎、東京

<p>主なグループ展</p>
<p>2007 「アレびごく」SAKURA FACTORY、東京</p> <p>2007 「黒川紀章キーワードライヴ」国立新美術館、東京</p> <p>2006 「Bunkamura Art Show 2006」Bunkamura Gallery、東京</p> <p>2006 「Ongoing vol.05 ヨコハマエクトプラズム」BanKART Studio NYK、神奈川</p> <p>2006 「第9回岡本太郎記念現代芸術大賞（TARO賞）展」川崎市岡本太郎美術館、神奈川</p> <p>2005 「BAGS SAVE THE EARTH——280人のアーティストによるオリジナルエコバッグ展」 ガーディアンガーデン、東京</p> <p>2005 「Ongoing Vol.04 よんでみてみて」BanKART Studio NYK、神奈川</p> <p>2005 「WONDER SEED+」トーキョーワンダーサイト本郷、東京</p>

<p>その他</p>
<p>2005 第20回 ホルベイン・スカラシップ奨学生</p> <p>2004 前橋アートコンペライブ2004 黒川雅之 審査員特別賞</p> <p>2002 トーキョーワンダーウォール公募2002大賞</p> <p>2002 Free ART Free 2001 FAF賞(大賞)</p>

<p>1979 Born in Hyogo</p> <p>2003 Graduated from Department of Oil Painting, Tama Art University</p> <p>2005 Completed the master program of Tama Art University</p>
--

daisuke samejima / nobuhiro fukui

<p>Selected Solo Exhibitions</p>
<p>2006 “Everyday Journey —To landscape painting beyond a level,” equal, Osaka</p> <p>2005 “+ beautiful world +,” petal fugal, Tokyo</p> <p>2003 “WALK IN CUBE,” Tokyo Wonder Site Hongo, Tokyo</p> <p>2002 “Tokyo Wonder Wall 2002,” Tokyo Government Office, Tokyo</p>

<p>Selected Group Exhibitions</p>
<p>2007 “ARE JIGOKU” SAKURA FACTORY, Tokyo</p> <p>2007 “Kisho Kurokawa keyword live,” The National Art Center, Tokyo</p> <p>2006 “Bunkamura Art Show 2006,” Bunkamura Gallery, Tokyo</p> <p>2006 “Ongoing vol.05 Yokohama Ectoplasm,” BanKART Studio NYK, Kanagawa</p> <p>2006 “The 9th Exhibition of the Taro Okamoto Memorial Award for Contemporary Art,” Taro Okamoto Art Museum, Kanagawa</p> <p>2005 “BAGS SAVE THE EARTH Original Eco-Bag Exhibition by 280 Artists,” Guardian garden, Tokyo</p> <p>2005 “Ongoing Vol.04 Yonde Mite Mite,” BanKART Studio NYK, Kanagawa</p> <p>2005 “WONDER SEED+,” Tokyo Wonder Site Hongo, Tokyo</p>

<p>Others</p>
<p>2004 Awarded “Masayuki Kurokawa Judges Special Prize, Maebashi Art Competition Live”</p> <p>2002 Awarded “Grand Prize, Tokyo Wonder Wall 2002”</p> <p>2002 Awarded “Grand Prize, Free ART Free 2002 FAF AWARD”</p>



FLAT BALLS 2006 2006

tokyo painting

福居伸宏 | Nobuhiro Fukui

<p>作家略歴</p>
<p>1972 徳島県生まれ</p> <p>1997 日本大学経済学部卒業</p> <p>2004 金村修ワークショップ参加</p>
<p>主な個展</p>
<p>2006 「There There」Joachim Gallery、ベルリン</p> <p>2005 「Trans A.M.」現代 HEIGHTS GALLERY DEN、東京</p>

ARTIST STATEMENT

私は、私の写真のある種のウイルスだと位置づけています。たとえば、盲目の人が光を取り戻したとします。網膜に差し込む十分な光、視神経から脳髄に伝達される正常なパルス。しかし、その人は、目に届く光を感知できたとしても、しばらくは「もの」を見ることができないでしょう。視覚経験のデータベースに「もの」が登録されていないからです。「見たことのないもの」は「見えない」ということです。「もの」が見えなければ、空間＝外界世界が知覚されることもありません。では、「もの」が見える人はどうでしょうか。データベースは過去の視覚経験から選択保存されたものです。今日、人々の視覚経験は、直接的にも再帰的にもメディアから大量供給される映像と情報に規定されています。敷衍して言えば、人が何を知覚するのかは、「もの」ではなくメディアによるということです。そうした状況にある人々が、私の写真に感染することで、何を見るのか、何が見えるようになるのか、ということに興味があります。

I’m regarding my photographic work as some sort of virus. For example, try and imagine a blind person who regains the sight of his eyes. Light hits the retina, and the optic nerves regularly transmit information to the brain. But even though this person is able to sense the light that hits his eyes, he won’t be able to “see things” for a while. That’s because there are no "things" stored in his database of visual experience. What one “has never seen” is something that “can’t be seen”. When you can’t “see things”, you are unable to perceive the outside world. So, how about people who can “see things”? They are equipped with databases in which selected objects from their previous visual experience are stored. The visual experiences of people living today are directly and recursively regulated by the acoustic and optical information the media are showering us with. One could go as far as to say that, what we perceive depends on the media rather than on the “things” themselves. What interests me is to see what such contemporary human individuals perceive – and become able to perceive – when infected with the virus of my photography.

作家略歴

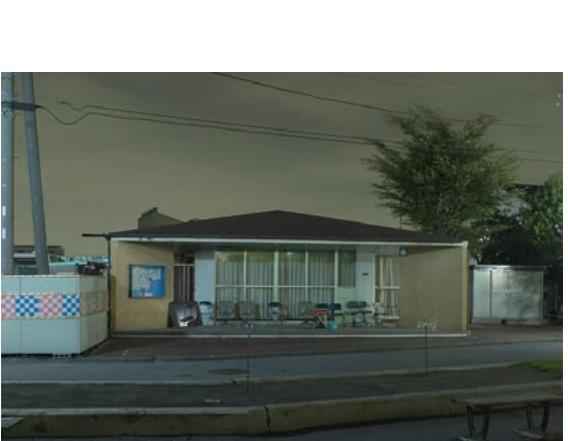
<p>作家略歴</p>
<p>1972 徳島県生まれ</p> <p>1997 日本大学経済学部卒業</p> <p>2004 金村修ワークショップ参加</p>
<p>主な個展</p>
<p>2006 「There There」Joachim Gallery、ベルリン</p> <p>2005 「Trans A.M.」現代 HEIGHTS GALLERY DEN、東京</p>

<p>主なグループ展</p>
<p>2007 「記憶の位相 — Aspects of Memory」アップ・フィールド・ギャラリー、東京</p> <p>2007 「ワンダーシード 2007」トーキョーワンダーサイト渋谷、東京</p> <p>2006 「とまれ、みよ」ギャラリー・アーキベラゴ、東京</p> <p>2006 「Sophie ERLUND & Nobuhiro FUKUI」Joachim Gallery、ベルリン</p> <p>2005 「Berlin - Tokyo Group Exhibition I」Joachim Gallery、ベルリン</p> <p>2005 「Expressions by Young Photographers in Germany 2005」ニコカミノルタプラザ、東京</p>
<p>その他</p>

巻頭特集『デジタル写真生活』Vol. 2(ニューズ出版、2006年)

巻頭特集『PHaT PHOTO』5月号増刊(びあ、2006年)

アートレビュー『PAPER SKY』no.15(ニーハイメディア・ジャパン、2005年)



Trans A.M. - 02 2005

BIOGRAPHY

<p>1972 Born in Tokushima</p> <p>1997 Graduated from College of Economics, Nihon University</p> <p>2004 Participated in a photography workshop “Osamu Kanemura Workshop”</p>
<p>Selected Solo Exhibitions</p>
<p>2006 “There There” Joachim Gallery, Berlin</p> <p>2005 “Trans A.M.” GENDAI HEIGHTS GALLERY DEN, Tokyo</p>

<p>Selected Group Exhibitions</p>
<p>2007 “Aspects of Memory,” UP FIELD GALLERY, Tokyo</p> <p>2007 “WONDER SEEDS 2007,” Tokyo Wonder Site Shibuya, Tokyo</p> <p>2006 “Nobuhiro Fukui & Katsuhiko Miyauchi - Tomare, Miyo,” Gallery Archipelago, Tokyo</p> <p>2006 “Sophie ERLUND & Nobuhiro FUKUI,” Joachim Gallery, Berlin</p> <p>2005 “Berlin - Tokyo Group Exhibition I,” Joachim Gallery, Berlin</p> <p>2005 “Expressions by young photographers in Germany 2005,” Konica Minolta Plaza Gallery, Tokyo</p>
<p>Others</p>

“Feature Graph” DIGITAL SHASIN SEIKATSU, Vol. 2 (News Publishing, 2006)

“Special Edition 1” PHaT PHOTO, MAY. Extra (Pia, 2006)

“Review Channels – Art” PAPER SKY, no.15 (Knee High Media Japan, 2005)

展覧会	
会場	トーキョーワンダーサイト渋谷
会期	2007年5月12日(土)–2007年6月24日(日)
主催	財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト

カタログ	
編集人	家村佳代子
編集	下倉久美 芦部玲奈 星野美代子
翻訳	アンドレアス・シュトゥールマン
写真	加藤 健
デザイン	寺井恵司
印刷	株式会社ヨシダコーポレーション
発行	財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山SOUTH棟3F
発行日	2007年11月30日

Exhibition	
Venue	Tokyo Wonder Site Shibuya
Date	May 12 (Sat.) – June 24 (Sun.) 2007
Organizer	Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture, Tokyo Wonder Site

Catalogue	
Editor	Kayoko Iemura
Editorial Staff	Kumi Shimokura Reina Ashibe Miyoko Hoshino
Translation	Andreas Stuhlmann
Photography	Ken Kato
Design	Keiji Terai
Printing	Yoshida Corporation
Published by	Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture, Tokyo Wonder Site COSMOS Aoyama SOUTH 3F, 5-53-67 Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo, Japan
Publication Date	November 30, 2007

TOKYO WONDER SITE
Institution of Contemporary Art and
International Cultural Exchange, Tokyo

トーキョーワンダーサイトは2001年、東京都の公募展トーキョーワンダーウォールと連携した若手芸術家支援育成、及びジャンルを超えた芸術家の創造的交流の場としてスタート。国際的に活躍するアーティストの展覧会、現代音楽の紹介、伝統芸能とのコラボレーション、アーティスト・イン・レジデンスの試行、アーティストとアートラバーによるクラブナイトまで、多岐にわたる活動を行ってきた。さらに2005年にはTWS渋谷を開館。国際的なアートのハブとして活動を広げた。また、2006年にTWS青山:クリエイター・イン・レジデンスをオープンし、制作プロセスを重要視する滞在プログラムの実施と、より国際的・創造的な交流活動の場として機能している。

Since its opening in 2001 as a new platform for art in Tokyo, Tokyo Wonder Site (TWS) has been functioning as a gateway for young Japanese artists in coalition with the Tokyo government-hosted “Tokyo Wonder Wall” competition. With a variety of exhibitions by internationally active artists, events introducing contemporary music, collaboration projects with traditional arts and crafts, artist-in-residence, and even club nights involving artists and art fans, TWS has been covering wide-ranging grounds. The opening of TWS Shibuya in 2005 marked significant steps toward the envisioned establishment of an international art network platform. In 2006, TWS Aoyama: Creator-in-Residence was launched to function as a base for internationally oriented creative work and platform for true dialogue and exchange, and to offer the artist-in-residence program focusing on the process of production.



須藤由希子 Yuki Sudo

近藤恵介 Keisuke Kondo

原良介 Ryosuke Hara

日野之彦 Koyuhiko Hino

奈良エナミ Etsami Nara

鮫島大輔 Daisuke Saegima

福居伸宏 Nobuhiko Fukui

 tokyo wonder site

Institute of Contemporary Art and
International Cultural Exchange, Tokyo